

## I 特別支援学校（病弱）

### （1）学校の概要

I 特別支援学校は、大人と小児の専門病院である医療センターに入院又は通院している児童生徒を対象とした特別支援学校（病弱）である。従来多かった療養型病院に併設する学校ではなく、小児専門病院に併設する学校である。病院の移転により特別支援学校も移転、新築された。在籍児は、従来の療養型病院に在籍していた病弱児、医療ケアの必要な重症心身障害児、専門病院に通院している慢性疾患児、また、最近、特別支援学校の在籍が増えている精神疾患・心身症児や発達障害を併せ有する児など、ほぼ、病弱教育が対象とする疾患をほぼ網羅していた。特別支援学校（病弱）の対象児のパターンを含んでおり、また、小学部、中学部、高等部が設置されている。教育課程も、準ずる教育他、いくつかの課程がある。平成 27 年 5 月 1 日現在で、小学部 39 人（うち、通学生 23 人）で 19 学級、中学部 30 人（うち、通学生 27 人）で 10 学級、高等部 50 人（うち、通学生 46 人）で 12 学級、教職員は校長、非常勤を含め 99 名である。

### （2）ICT 活用の状況

I 特別支援学校は、LAN の端末はあるが、無線 LAN は設置されていない。WiFi ルーターが研究協力で利用できるが、県として利用するのは今後の課題である。教室では、プロジェクターや液晶テレビが利用でき、教室内の PC 画面を映すことができる。実際に、授業で、教員や生徒が使用しているのを参観した。ただし、電子黒板については、1 台のみである。タブレット型コンピュータは数台あるが、研究協力などで得たものであり、現在、購入を教育委員会に申請中である。訪問学級の病院内にも、教育で利用できる無線 LAN や LAN 端末は整備されていない。

### （3）事例

今回の訪問で、5 事例の提供があった。

#### 1) 日常的な活動、教育での実践事例（4 事例）

デジタル潜望鏡を使って見たいものを見よう（車イスを使用していると視野が固定されるので、ICT を利用して視野を広げる）院内学級をもっともっと学べる環境に！「院内学級の学習環境をタブレット端末で向上する取り組み」、本当にしたいことを叶える ICT「テレビ電話を使って図書室の本を自分で選ぼう」、職場体験実習「職場体験実習を院内で」、今回、訪問で追加できた特別活動（小学部わくわくタイム）「みんなで紙飛行機を飛ばそう！」である。

いずれも、病弱教育における、時間的制約、空間的制約、病状による制約に対する支援機器となるが、無線 LAN や電話回線など、研究的な取り組みとして行われている。車いすだと体を動かさないので、視野が制限されることや病室にいると図書館にいけないことなど、児童生徒の制約を考慮した活用ができています。異色なのは、工業専門学校と共同で開発した機器を使っての特別活動である。明確な支援ではないが、自分で折った紙飛行機を飛ばす機械であり、紙飛行機をおいてから、カタパルトを移動し、発射させる。児童生徒には好評で、そのために、折るという作業を行うこと、順番を待つという行為が必要であるので、精神疾患や心身症、発達障害を併せ

持つ児童・生徒が適応していた。これは、発想の転換であると感じた。必ずしも直接的な障害を扱っている

## 2) 入院している高校生の ICT/AT を使った職場体験

I 特別支援学校での、特に特徴的な事例として、訪問教育の対象である、入院している高校生の職場体験をあげる。筋ジストロフィーのある生徒であるが、携帯電話とインターネットを利用した職場体験を行っている事例である。エクセルとワードとして課題の資料が企業から提供され、それを本人が完成して提出する。また、その課題のやり取りを携帯電話で行っている事例である。訪問時に、実際に提出されたワードとエクセルを使って操作しているのを拝見した。

また、企業とやり取りをしている映像を拝聴した。タッチパネル系のタブレット型コンピュータを以前操作していたが、病状がすすみ、現在は、より微力で操作できるマウスを利用できるタブレット型コンピュータを利用しているとのことで、本人との意見交換でも、作業を行うために微力で動くマウスの利用が有用であるとのことである。ただし、マウスの機種によっては思った動きができず、いくつか試したということである。単に、入力装置の種類ではなく、その使用感により利用できるものと利用できないものがあるという視点を改めて確認できた。今後、卒業後の進路として考えると、一つの可能性が広がると考えられる。今後は、社会の対応が望まれるところである。なお、本児は、タブレット端末を用いて、仲間将棋をおこなっているとのことで、腕前も相当なものであるということであった。

病弱教育の対象は、知的障害の有無を問わないので、準ずる教育から知的障害の教育課程まで提供されているが、キャリア教育を考えると、在宅（在病院、在施設）での仕事を視野にした教育は ICT/AT 活用の好事例である。

### (4) 特徴的な点に関するまとめ

病弱教育では、治療や病状によって、様々な障害をもつ場合には、それらの障害にあわせた

ICT/AT 活用事例がある。今回、身体障害による肢体不自由と似た活動事例だけではなく、近年、課題となっている精神疾患における活用事例であった。また、特徴的な事例では、病弱

では、知的障害を伴わない児童生徒が多いことと、その児童生徒がこれからの社会活動に生かせる職業体験をしている事例を紹介した。これは、特別支援学校だけではなく、今後のインクルーシブ教育を考えると、地域の学校でも参考になる事例である。

(新平鎮博)

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究—学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理—」（平成 28 年 3 月），86 -87 に記載された内容である。